

岡本家国登録有形文化財答申記念講演会

講演会について

岡本家住宅が国の登録有形文化財（建造物）として登録するよう答申がなされたことを記念しまして、講演会を開催します。講演会の終了後は岡本家の一部を見学します。

開催日：平成 28 年 10 月 15 日（土曜日）

時間：13 時 30 分から 15 時まで（受付は 13 時開始）

講師：矢ヶ崎 善太郎 氏（京都工芸繊維大学准教授）

講演テーマ：『奈良県の近代和風建築-岡本家住宅を中心に-』

会場：八木札の辻交流館 2 階（橿原市指定文化財）

定員：50 名（先着順。予約は必要ありません）

企画・主催：橿原市教育委員会文化財課

奈良県の近代和風建築-岡本家住宅を中心に

1.はじめに

岡本家住宅が登録文化財として登録するよう答申がなされたとのこと、誠にありがとうございます。この建物を維持・保存されている岡本家様と文化財登録に尽力された NPO 法人八木まちづくりネットワークの皆様に敬意を表します。（私邸につき講演に用いた画像の撮影はご遠慮ください）

2.日本建築史における岡本家住宅

通り沿いに生業を持つ都市型住宅を町家と呼びます。京都の町家を思い描くと、決められた町割に密集して建つため間口が非常に狭いのが特徴ですが、大和八木の街道沿いの町家は間口が広くゆったりとしています。そのため「街道設置型の町家」と呼べるのかもしれませんが。

岡本家住宅の建築年代は、観察や周辺資料により明治の 30 年代終わり頃に建ったと考えられます。その時代は、日本建築史上は近代（幕末～昭和）に属します。日本建築史においては、伝統的な建築技術やデザインが西洋に影響を受けた時代の建築を近代建築と呼びます。近代建築の研究対象としては「西洋風建築＝洋館」が先行する中、いわゆる和風建築は、近世からの建築を踏襲しただけの建物と見なされてきたため、その研究はおろそかにされてきました。が、最近になって近代和風建築の研究もようやく進んできました。

というのは「和風」とはということばは「洋風」が入ってきてはじめて芽生えた考え方で、それこそ近代の証です。一見伝統的な建物でも、近代に建てられた和風建築には何かしら近代の要素が含まれていると考え、それを見極めようとする研究の対象が「近代和風建築」です。

3.奈良の近代和風について

風土を反映して、建築の構造・素材・意匠などすべてに地域性があります。

ここでは、奈良の近代和風について考え、紹介します。

まず、旧奈良県庁舎（M28、現存せず）建設に建築家長野宇平治が関わります。それまでは大工がつくってきた和風建築に対して、西洋建築を学んだ建築家が参入してきたのです。

奈良特有の事情として古社寺がたくさんあり、その保存について建築家が立ち向かっていた時期でした。長野宇平治【うへいじ】も M20 年代に奈良に来て新しい建築を設計するいっぽうで、古社寺調査を始めた建築家です。

建築家たちは、奈良で新しい建築を設計する際に奈良を意識した建築、奈良風の和風を試みました。M29 には関野貞【ただす】が旧奈良県物産陳列所（重要文化財）を設計しました。屋根は和風ですが、窓廻りなどに洋風の要素があり、エキゾチックな建築です。関野貞も古社寺の保存修理に携わ

っています。



旧奈良県立戦捷記念図書館

M41 に建てられた旧奈良県立戦捷記念図書館は、S43 大和郡山市民会館として奈良公園から大和郡山に移築されています。橋本卯兵衛の設計です。M42 奈良ホテルは、奈良の近代和風建築の代表といえる建築です。日露戦争後観光客を呼ぼうとして都ホテル西村仁兵衛、関西鉄道、奈良市の発起によって建設されたホテルで、設計者の辰野金吾は東京駅や日本銀行本店、日本銀行大阪支店を設計していて、日本における最初の建築家ともいわれています。工事監督は、その後関西建築界の中心的存在となる河合浩蔵でした。(下線部は奈良県近大和風調査報告書より)



旧高市郡教育博物館

この付近の近代和風としては、M36 旧高市郡教育博物館（今井町まちなみ交流センター華薈）があります。橋本卯兵衛の設計です。

4.唐招提寺の金堂



唐招提寺の金堂

さて、なぜこれが近代和風建築でしょうか？ここで大工木村米次郎（堺出身）の登場です。木村米次郎は当時古社寺の保存修理に携わるなか、長野宇平治に出会います。奈良女子大学（旧奈良女子高等師範学校）の校舎の移築工事（M42）でした。この際、広い教室を必要としたために西洋の技術である「トラス」(△構造)を取り入れました。建築家長野宇平治の発想を大工木村米次郎がつくったといえます。



旧奈良女子高等師範学校

ときは関野貞による唐招提寺の保存修理が始まった頃でもあります。唐招提寺金堂は奈良前期の建物ですが、実は当初とだいぶ形が違ってきます。当初は屋根勾配が緩かったのですが雨漏りなどの不具合を理由に鎌倉時代に勾配を急にしています。それを、さらに明治時代に修理する際に今度は「ト

ラス」を採用しました。長い距離を、柱をたてずにもたせる手法として必要だったからです。

外観は元のまま、より丈夫にするために、見えない部分の構造にはその時代の手法を使うという古社寺保存のセオリーを具現化したことは、現在の文化財保存の手法に通じることです。

当時の奈良は「先進的な技術を積極的に取り入れながら古いものを保つ」という近代建築に取り組むいわば「実験場」ともいえる地であったといえると思います。

今井の華葺もトラスを使用しているように、当時奈良には古社寺保存の現場で先進的な手法に携わった大工がたくさんいたはずで、奈良の各所でそうした経験を活かしたのではと思います。

ちなみに、最近の唐招提寺の修理の目的は耐震補強でした。阪神淡路大震災後、人命を第一に考えた文化財保存の考え方となっています。

5. 岡本家住宅について

■表屋造り

古代からの交通の要衝八木札の辻から下ツ道を少し南にいった西側に建ちます。道路に面して入口と部屋を配し、ゆったりとした間口を持ち、奥にとっても長い屋敷構えです。奥行き方向には、街道に面した表屋から玄関・主屋へと続き、渡り廊下と中庭、離れと内蔵、その向こうにかつては蔵がもう二棟並び、大離れを敷地の端に配しています。この表屋・玄関・主屋の連なる構成を「表屋造り」

【おもてやづくり】と呼びます。規模の大きい町家にときおり見られる構造です。こうして建物の間に中庭をとることで、明かりや風、そして排水の流れをうまく処理した構成ともいえます。

■中廊下型プラン

岡本家住宅のもうひとつの特徴は、主屋の平面プランが「中廊下型」であることです。「中廊下型」は、従来は座敷同士がふすまを介して接して並んでいたところ、近代になって建築家の登場で現れたプランといわれていますが、岡本家はその中で

も早い事例といえます。部屋のプライバシーを守り動線が整理されています。

■螺旋階段

蔵の螺旋階段も特徴です。一般的には直線階段を使いますので、そこにはデザインの意図があらわれているように感じます。

町家が並ぶことで自然と美しい町並みが構成されます。しかし調べてみますと、一定の範囲の中で高さや色合い、高さに少しずつ変化をつけていることがわかります。「単調ではない統一感」といえ、日本の町並みの特徴といえます。

■千本格子

測ってみてわかったことですが、岡本家においてもファサード(表)の千本格子が右側、中央、左側で少しずつ違っています。ほんの一分(3mm)ですが、ちょっとした変化をつけています。

表屋の土間西側に揚げられた「華頂」の看板には京都との関係も忍ばれます。

■ハルサ

敷居に使われている「ハルサ」(堅木の一種ミズメのこと)を使うのは奈良特有ではないかとお聞きしました。

■石畳

建物を抜けるたびに広がる中庭空間には目を見張ります。

玄関前の石畳をご覧ください。中央を少しふくらませて雨が降ったときに水がたまらないように、非常に丁寧な石工の仕事がみられます。

■準棟纂幕

岡本家の通り庭の吹き抜けの上には「煙出し」がありません。竈の煙は煙突を使って出しているのです。また見上げた火袋(吹き抜け)にみられる木組みを京都では「準棟纂幕」【じゅんとうさんぺき】と呼び大工の腕のみせどころとなっています。見事です。

■ぱったり床几

入り口脇にはぱったり床几【しょうぎ】の痕跡があります。

■ 梅普請

良材が使われていることも岡本家の特徴です。柱や鴨居、床板に梅【とが】がつかわれています。京都でも名建築には梅普請が多く、それらの梅の多くは奈良から運ばれたそうです。

■ 珍木・奇木

良材のほかに珍木・奇木を多用しているのも岡本家の特徴です。珍木・奇木を使うことは時代の流行であったようで、表情豊かな皮付きの材料、竹、唐木など珍しい南洋材（輸入材）をよく使います。文人趣味とか煎茶趣味ともいわれます。

たとえば、ヒカゲヘゴ（2階座敷の落とし掛け）や台湾産の阿里山（1階奥座敷の床柱）がそうです。中廊下に面する建具も繊細な舞良戸【まいらど】を使っています。

■ 猿の頬

表屋オクミセの天井を見上げると、太い梁に直接2階の床板を張っています。その梁はあたかも断面が「猿の頬」のように大きく斜めに削っています。構造上の用をなしながら細くみせようと数寄屋的な手法を試みています。

■ 小瓦

表屋の西面に使われている小瓦をみてください。非常に小さな瓦を、手間をかけて並べています。そのほか、各室の欄間や渡り廊下の掛け込み天井などにも繊細なデザインがなされています。

■ 日よけ

繊細な織物を扱っていたために、日よけのロールスクリーンの装置が残っています。

■ 板軒

表屋の庇には垂木がなく「板軒」となっています。厚い板をきちんと並べています。理由はさだかではありませんが、柱の下に銅板を敷いています。

■ 避雷針

避雷針も住宅においては非常に早い事例です。愛媛県の事例「広瀬邸」（重要文化財）でM20の例があります（別子銅山で栄えた家、避雷針は大阪製）。



■ トラス

主屋小屋裏に一箇所だけ「トラス」が使われています。前述の唐招提寺など古社寺修理に携わった大工が試みた可能性があります。非常に中途半端なもので役に立っているようにはみえませんが、見様見まねで新しい時代の技術に取り組んだ例かもしれません。ちなみに蔵にはきちんとした「トラス」が使われています。

■ 茶室

S11 茶室には地元の職人さん方の名前が残っています。

6.最後に

岡本家の調査ではじめて八木に参りましたところ、その町並みに驚きました。そして本来なら文化財に指定して行政によって守るべきものが、町の人々によってこつこつ大事に守られてきていることにまた驚きました。

これからも、大事に守っていかれますようお願いしています。

（講師：矢ヶ崎善太郎、講演録作成・写真：稻上文子）